

Q1. 妙中パイル織物株式会社様の沿革や、会社概要についてお話しください。

弊社は 1950 年に会社組織として発足いたしました。私の祖父が創始者でスタートしています。当時はメリヤス編物からスタートして、その後パイル織物を開発するなど、新しい物を時代の流れに沿って作ってきたという歴史がございます。古くは服地用のベルベット、また椅子生地や動物のイミテーションファーといったものを生産し、工場として成り立ってまいりました。

Q2. ここ高野口町は「パイル織物」の生産地として古くから有名ですが、その歴史について教えていただけますか。

江戸時代に「川上木綿」という綿の織物からスタートしたと聞いております。明治時代までには「ネル」という綿の織物をアザミというトゲトゲした実で引っ搔いて、「起毛」という毛羽を出すような織物が盛んになりました。パイル織物はそれがスタートなのかもしれないです。その後、明治の中頃から「再織り」「シェニール織り」という毛虫の様な毛の生えているモール糸で柄を作る織物を作ってきた経緯があります。それが大正時代頃まで、かなりたくさんを海外に輸出していて、その後「シール織り」という、毛皮調の織物が広がり、輸出産業で大きくなっていきました。

高野口の産地は全盛期 400 社ぐらいあったのですが、私が 30 数年前に、この産地に戻ってきた時には、まだ 300 社以上残っていました。その当時は車のシートを沢山作っていました。私の所は、イス張りの生地、服地用のベルベット、フェイクファーの薄い生地など、毛の長い毛皮用のもではなく薄いものが得意で、それを極めて作っています。薄いベルベットの生地などに関してはどこにも負けないものを作っています。例えば隣のパイル織物工場では編物でパイル織物作っている。また別の工場では編物でも毛の長い毛皮みたいなものが得意です。それぞれの工場が特色を持ったもの、自分が得意としているものを打ち出していつ、突き抜けて世界トップクラスのものを作っている所が生き残っています。

Q3. 貴社ではどのようなものを製造されていますか。

現在作っているものは、椅子用のモケットという生地です。モケットの用途は、観光バスのシートであったり、今は使われてないですが車のシートであったり、電車用の生地、インテリア用の椅子生地だったりします。椅子生地はコンサートホールなどに吸音性がいいので使われていたりしています。有名なところでは、横浜アリーナやサントリーホール、紅白歌合戦をやっている NHK ホールの椅子生地にも使っていただいています。あとは服地です。モケットという生地はちょっと太めの糸で荒く織ったカチツとした生地ですが、それを細い天然繊維を使って薄く軽く仕上げたものがベルベット生地になります。紳士物のジャケット、婦人物のジャケット、スカート、パンツに使われているものになります。あとはレーヨンのイミテーションファーを作っています。いわゆる「大阪のおばちゃん」の柄を印刷しています。プリントと言いますが、豹柄や虎柄、キリンなど動物の柄はほとんど持っているので、その印刷をして動物柄のイミテーションとして売っています。

今、一番の主力商品は液晶パネルを作る時に使う特殊なベルベットです。液晶というのはガラスの表面に樹脂が付いています。我々が作っているベルベットでその樹脂を付けたガラ

スを擦る工程があります。擦すられた後、ガラスをサンドイッチにし、中を真空にして液晶を入れるのですが、その擦られた方向に綺麗に液晶が並ぶらしいです。画像を出すための「配向」と言いますが、その液晶の向きを揃えるための布を作っています。それが今売上の 3 割ぐらいです。

もう 1 つは、お化粧品用のパフ生地です。綿パフというのは、この産地で 50 年以上前から作られているのですが、10 年ぐらい前からポリエステル合成繊維を使ったすごく細やかなパフを作っています。昔の綿パフのようにベタッと付いてしまうものではなく、すごく薄く細かく思った量が乗せられるようなパフを作っています。これは有名な化粧品メーカーの化粧パックの付属品として販売されています。この化粧パフが約 3 割で、この 2 つで 6 割から 7 割の売り上げがあります。

あとはインテリア用の椅子生地やカーテン、ちょっと特殊な所ではブラシです。服に付いた毛羽を取る埃取り用のブラシであるとか、アルミサッシの縁に貼ってある細いテープのようなゴミ取り用のブラシであるとか。その他、面白いところと言うとマジックテープ用の生地です。ベリベリと剥がすタイプのもので、一部パイル織物で作られたりしています。

Q4. 私たちの身近なところではどのようなものに使われていますか。

椅子生地では 30 年に 1 回ぐらい作っている国会議事堂の議場の椅子や、今の新幹線 700 系のシート。これは持ち回りみたいなのがあって、今は他の機屋さんが織っているのですが、最初の立ち上がり時は、弊社が全部作って大きな織物屋さんを通じて JR に納めていたという経緯があります。あとは大手鉄道車両用の生地を納めている大きな機屋さんがあるのですが、そこに納めているもので阪急電車の生地ですね。関西の人はよく知っておられると思うのですが、阪急電車のシートの生地も作っています。

Q5. 貴社の商品の特徴や強みについて教えてください。

椅子生地などに関しては、どちらかというと毛の長いものではなく短いものが得意なのですが、短いものを織るには結構技術がいるんです。頑丈で暖かい、他のところではできないことをうちはやっています。ここの産地にはパイル織物工場が 20 社以上あるのですが、弊社は糸を買ってきたら反物にできるところまでの全部の工程を持っています。他社は織るだけとか、染めるだけとか、仕上げ加工だけとかです。毛が生えているのでブラシをかけたり毛を刈り揃えたりする工程があって、そこだけをやっている工場もあります。弊社は糸を買ってきたら全部仕上げ、染めも織りも、仕上げ加工も、場合によっては柄をつけるプリントもした上で、最終の反物にし、検査し、お客様のところに届けられる設備を持っています。例えば海外の商品で「これと同じようなものを作れますか」と言われたら、そのコピーもできますし、そこからちょっとひねったもの、もう 1 つ違う加工をしたようなものも作ることができる設備があります。それを駆使して他のメーカーさんではできないようなものを作っています。

Q6. 時代に求められる「ものづくり」をされてきたという事ですが、どのような取り組みをされてきましたか。

時代に応じてというのは、自分達が見つけてくる所もありますし、お客様からの「こういうものを作れないか」というご相談で作る事も多いです。我々はものを作って行く中で、そういう情報を取りに行くことが、すごく難しいんです。

液晶パネルを作っているところに、なぜ布を使うのかと思いますが、たまたま布を探している人がいて、それとの巡り合わせがあります。産業資材のいろんな分野の中で、目に見えないところで実はこういう生地を使っているところもあつたりする。アルミサッシについている細いテープもそうです。その時代時代でニーズの情報を取ってきて、使えるものを提案し、お客様と話しながら新しいものを作って行くということをやっています。

今も変わらず使っていただいているものは椅子の生地やカーテンの生地、動物柄のフェイクファーで、日本以外でもたくさん作っているところがありますが、弊社ではずっと昔から50年以上続いている商品もあります。ただ、今主力になっているものは、新しい時代の流れの中で、できたものです。今はもう量はそんなに必要ない時代になってきているので、我々はそこをどうやって生き残っていくかです。お客様に満足してもらって、自分の会社も、皆さんにも喜んでもらえるようなものを作っていけるか、またそれを探すのに、本当に苦労しています。

Q7 . 貴社の「将来ビジョン」についてお話しください。

今のニーズというのは、多品種で小ロットです。たくさんもの売って商売を続けていくのは非常に難しいので、その時代に応じたものを小ロットでうまく作っていくような考え方をメインに進めていきたいと思っています。これまで生地を作って反物にして売るというのは長年やって来た事ですが、5~6年前から最終の商品、カバンであるとか、小物入れ、名刺入れなどを作って、自社のブランドを付けて販売を始めています。自社のブランドにできるだけ値打ちを持たせて世間に認知してもらった上で、商品に対する信頼を確立したいと思っています。もちろん最終製品だけでなく布自体も「買いたい」と言ってもらえる、そういうものを作っていきたいと思います。「妙中パイル」のブランドを高めていって、世間でもっと認知してもらって、長い間ずっと続けていける、それを確立するのは私の仕事だと思っています。